

自己制御学習に関する研究(2)

— 学習目的が知識獲得に及ぼす影響について —

○桐木 建始 岡 直樹

(広島女学院大学) (福岡教育大学)

様々な知識を獲得していく場合には、その知識がどのような目的で利用されるかによって、学習のプロセスが変化すると考えられる。ここでは、学習目的、学習方法、既有知識の程度を変数として、新しい知識の獲得について検討を加えることとする。

方法

実験計画 2×2×2の要因計画を用いた。第1の要因は学習目的についてであり、指導者条件と記憶条件の2条件が設けられた。指導者条件の被験者には、学習した内容を後で英語の苦手な中学生に教えるという目的で学習させた。記憶条件においては、自分の知識を深めるという目的で学習させた。第2の要因は学習方法についてであり、メモ学習条件と自由学習条件の2条件が設けられた。メモ学習条件の被験者には、メモを取りながら課題を学習するように求めた。また自由学習条件の被験者には文章を読みながら自由に学習するように求めた。第3の要因は、被験者の既有知識についてであり、事前テストの成績から低知識群(3~10点)と高知識群(12~19点)を設けた。いずれも被験者間変数であった。

被験者 大学生96人(男性32人、女性64人)であった。事前テストの結果から高知識群(男性16人、女性32人)と低知識群(男性16人、女性32人)へ振り分けた。そして、学習目的、学習方法に関する4条件へ男性8人、女性16人ずつ無作為に配分した。

学習材料 学習材料は英語の前置詞(at, in, on)についての説明文であった。前置詞1つについて例文と説明文3種類ずつを用意した。

事後テスト 学習成果を評価するために、事後テストとして、前置詞の(at, in, on)の部分を開欄にした問題46問(例: He was born () 2000.)を用意した。それぞれには和訳の文章を添えた。

事後評価 学習のおもしろさ、充実度、成績予想、前置詞に対する自信、説明文の評価、説明文への興味、教授意欲に関する質問紙(7段階)を用意した。

手続き 実験は2人~8人の小集団で行った。まず始めに事前テストを5分間行った。次に、学習材

料を10分間提示し、内容をよく理解しながら読んで、書かれている前置詞の使い方について覚えるように求めた。各条件の教示は次のようなものであった。学習目的に関しては、指導者条件の被験者には、教えなければいけない重要な点について考えながら学習するように教示した。記憶条件の被験者には、自分の知識のために学習するように教示した。学習方法に関しては、メモ条件の被験者には、A4の紙を配り、メモをしながら重要な箇所をまとめて学習するように教示した。自由学習条件の被験者には、自分の覚えやすい方法で、学習するように教示した。冊子を回収した後に、事後テストを10分間行い、空欄に前置詞を記入させた。最後に質問紙に記入させた。

結果 および 考察

事後テストにおける解答を、1問1点46点満点で得点化した。各条件の被験者の平均得点をFig. 1に示す。分散分析を行った結果、学習目的×学習方法の交互作用が有意であった($F(1, 88) = 6.23, p < .05$)。単純主効果の検定を行った結果、メモ条件における学習目的の単純主効果が有意であった($F(1, 88) = 5.24, p < .05$)。また、指導者条件における学習方法の単純主効果が有意であった($F(1, 88) = 7.14, p < .01$)。参考までに、単純・単純主効果の検定を行ったところ、高知識群におけるメモ条件での学習目的の単純・単純主効果が有意であった($F(1, 88) = 5.57, p < .05$)。また、高知識群における指導者条件での学習方法の単純・単純主効果が有意であった($F(1, 88) = 6.92, p < .05$)。以上の結果から、高知識群においては学習目的によって学習方法の適合性に影響が及ぼされることがわかる。

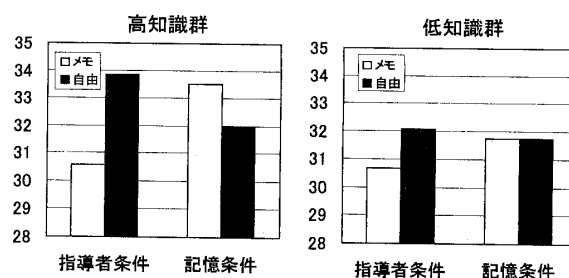


Fig. 1 事後テストの成績